# 高校調査書

推薦入学制の導入や欠員補充第２次募集の実施などにより高校調査書の活用がはかられ、高校調査書の大学入試全般に占める位置は高まりつつある。このため各大学に於ける高校調査書に対する分析はますます広範化しつつある。

## 高校調査書成績と入試成績

共通第１次学力試験成績、第２次学力検査成績、第１次第２次総合成績等と高校調査書成績との相関についての分析は、従来と同様に多くの報告が行われている。その結果は例年と同様に共通第１次学力試験との相関係数は高く、第２次学力検査との相関係数は低い傾向を示している。

また、高校調査書成績と入学試験成績との相関についての分析において、調査書の評定平均値を対象とするだけでなく、各教科別に相関係数を求めて分析する報告も多くなっている。これは、共通第１次学力試験、第２次学力検査の教科目毎の傾斜配点や第２次学力検査教科目の内容の再点検にとって、基礎的資料としてそれらと高校調査書成績との関係が重要であることからも当然であると思われる。

## 高校調査書成績と合格率

高校調査書の成績に基づく学力成績を分析するため、高校調査書の学習成績と合格率との関係を調査している報告がある。この場合、高校調査書の学習成績と合格率との相関は高いのが一般的である。学習成績のランクＡ以上のものは浪人することによって合格率が低下する傾向にあったが、学習成績がランクＢ以下のものは浪人することによって合格率が向上する傾向にあった。

## 高校調査書成績と入学後の成績

共通第１次試験の実施後に入学した学生の成績（学内成績）に関するデータが蓄積されてきたこともあり、高校調査書評定平均値と入学後の教養課程成績、専門課程成績、卒業時総合成績等との相関についての分析を行っている。なかでも教養課程成績との相関について分析している例が多いが、その相関は共通第１次学力試験、第２次学力検査と高校調査書成績との相関よりもかなり高いことが指摘されている。

専門課程成績、卒業時総合成績と高校調査書成績との関連について分析している報告においても、概して高い相関が得られたことを報告している。さらに、留年あるいは退学した者の割合は、相変わらず学習成績のランクの低い者ほど高率であるが、全体的にはここ数年来その比率は低下しているという報告もある。また、第２次募集の入学者集団は、学習成績のいずれの

ランクでも一般選抜よりも高い割合で落伍する者が多いとしている。

### 高校調査書成績と推薦入学

推薦入学の実施にあたっては、その選抜に高校調査書成績が重要な資料になる。このため、推薦入学者の高校調査書成績と入学後の成績の関係を分析した報告が見られた。これによると、高校調査書成績の点数が一般入学者のそれよりも劣った生徒を推薦した高等学校があること、また、推薦入学者の学内成績が一般入学者それよりもきわめて悪い例があることを指摘している。さらに、推薦合格者の高校調査書成績は優秀であるが、入学後の成績は必ずしも良いといえないことを指摘し、推薦入学者の選抜において高校調査書に対する配点比率を下げることが必要であるとしている。

共通第1次学力試験成績、第2次学力検査成績を用いて高校調査書評点平均値を更正するなどして高校間格差を検討した報告も見られた。

## 選抜の諸方式

『選抜の諸方式』という入学者選抜に関する調査・研究テーマに属する問題は多岐にわたる。その中で、面接（個人あるいは集団）試験、小論文および実技試験に関する研究の動向と、受験機会の複数化に直接関係する研究の動向は、それぞれ独立の項目としてとりあげられるので、ここではそれ以外の選抜の諸方式の研究の動向を概観する。とはいえ、昭和62年度からスタートした受験機会の複数化という大きな制度の変更に加え、平成2年度からは共通第1次学力試験に代わる大学入試センター試験の制度が新たにスタートした。また、入学者選抜試験を分離・分割方式で実施する大学がますます増える傾向にある。これらの矢継ぎ早の変化に適切に対応しようとして、各大学ではいろいろの角度から調査・研究を実施している。以下に、主として2段階選抜、推薦入学、第2次募集などに関連して行われた各大学の入試研究動向について述べる。

### 2段階選抜

2段階選抜方式、すなわちいわゆる足切り方式は社会一般から批判されているが、この方式を採用することにより、入試の一発勝負的性格をやわらげ、よりキメの細かい選抜が可能であるとして、2段階選抜を積極的に評価している大学もある。しかし、圧倒的多数の大学は、試験場確保、採点能力、入試事務遂行能力などの理由から、いわば必要悪的に2段階選抜方式を採用しているように思われる。昨年に引き続き、2段階選抜がなければ最終的な合否判定で合格